

「子育ては地域の役割」

杏林大・加藤 居場所作りを 教授講演

ク会
リン修
あび
研

奄美地区障がい者等基幹相談支援センター（びあリンク奄美）は26日、奄美市名瀬のアマホームPLAZA（市民交流センター）で、2023同協議会研修会をした。杏林大学保健学部教授で精神保健福祉士の加藤雅江教授（56）が「子どもに寄り添った対人支援」と題し講演。自治体や福祉施設の担当者らとのパネルディスカッションもあり、自殺思考や不登校児童への支援など、多方面からの情報交換があった。福祉・教育関係者などオンラインを含む約110人が参加した。

研修は、子どもから一へのアプローチ、若年見えてくる家族の課題「世代の引きこもりへ関

わり方などをテーマに開催。



講演した加藤教授は、大病院の救命救急センターで、自殺未遂や薬の過量摂取（オ

ーバードーズ）で搬送された子どもと接した経験から、「死にたい、消えたいと思う背景を知

ることは難しく、全ての子どもが発信できる体制づくりが必要」などと訴えた。

2023年の20歳未満の自殺者は769人、若者の4人に1人が「希死念慮（自殺願

望」があり、10人に1人が未遂者であると説明。学業の不振や進路の悩みなど理由はあ

るが、「自己肯定感が低いのは大人の責任」と断じた。

自身が運営する子ども食堂やフリースペースの例を挙げ、「子育てを地域の役割と考えることで、重層的な支援が可能になる。小学

生時代から大人に話すことが苦にならない環境づくりが必要」と訴えた。

困り事は子どものうちに解決する必要がある。支援がないと、困り事を抱えたまま大人になる」と警鐘。子どものSOSサインをす

くい上げ、想像力を働かせることが大人としての心掛けたとも話した。

パネルディスカッションでは、龍郷町子ども子育て応援課の保育士・川口みどりさん

が、「支援する側とされる側との方向性にずれが生じないよう関係機関と情報を共有する必要がある」、奄美市教育委員会スクールソーシャルワーカー・コ

ーディネーター・福山八代美さんが、「理由のない不登校の例が多い。成長して当時の気

持ちを話すことがあり、関わり方を考えさせられる」、児童発達支援センターのそみ園（奄美市）の大海智美

さんは、「親の困り感がなく、継続した支援ができずもどかしさを感じる」などと現状を発表。

加藤さんは、「まだ行き届かないが、子ども自身が自分で選べる多様な「場」を作ることが望ましい」と希望を述べた。

びあリンク研修会で講演した加藤雅江杏林大学教授（26日、アマホームPLAZA）

SOS出せる地域に

子どもの支援テーマに研修会

奄美地区地域自立支援協



救命救急センターでな...
・新設の多摩地区、および23区
・3次救急医療の基幹病院とし
・30床のベッド、手術1900〜200
・入院患者のインテーク業務、
・出し、緊急解決に向けた支援を
・患者の身元確認、施設確保、保
・イメージを造ることがないよ

「子どもに寄り添う対人支援」について加藤雅江さん(市内)が講演した奄美地区地域自立支援協議会の研修会(26日、奄美市名瀬)

奄美地区地域自立支援協議会(会長・麻井庄二奄美市福祉政策課長)の研修会が26日、奄美市名瀬のアマホームPLAZA(市民交流センター)であった。杏林大学健康福祉学部教授の加藤雅江さんが「子どもに寄り添う対人支援」をテーマに講演。加藤さんが理事長を務める居場所づくりプロジェクトの活動を報告したほか、関係機関が連携し、子どもや親がSOSを出せる地域を構築する必要性を説いた。

加藤杏林大教授が講演

加藤さんは約20年間、杏林大学付属病院医療福祉相談室でソーシャルワーカーとして勤務。その中で自殺未遂者や暴力被害者に多く対面し、支援を行ってきた。2016年にNPO法人居場所づくりプロジェクト「だんだん・はぁ」を立ち上げ、子ども食堂などの活動に取り組む。

研修会には奄美大島5市町村の福祉サービス事業所や教育、医療機関、行政の

敷居の高さ、「支援を受けたい」と結んだ。研修会の後半は、龍郷町子ども子育て応援課の保育士・川口みどりさん、奄美中教育委員会のスクールソーシャルワーカー・福山八代美さん、聖隷福祉事業団のぞみ園の主任相談支援専門員・大海智美さんによるパネルディスカッションがあり、それぞれの事例や課題などを報告した。

関係機関と連携することの目的は、個々の「困りごと」のつながりを探り、情報の集約によって家庭を立体的に理解することとし、「情報共有をするときに自分から見えていることが全てではなく、ほかの人たちの専門的な意見を聞きながら確認をしていくことが必要」と話した。

終わりに、地域の中でできる子育て支援として、変化を求めないことやこちらの物差しで「困りごと」を決めつけないことなどを紹介。子どもの発信、発言の機会を保障し、サインをす

子育て世代が孤立しているのにもかわらず、SOSが発信されない理由としては、情報にアクセスできない環境や相談することの